

# Mon Nara



Numéro290 Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会

JUIN 2019 6月号

## 奈良日仏協会創立 25 周年記念「フランスの音楽と文化祭」 最終申込受付中！ 皆様のご参加をお待ちしております。

6月22日(土)の創立25周年記念行事「フランスの音楽と文化祭」がいよいよ目前に迫ってまいりました。場所は近鉄生駒駅から歩いて3分の生駒セイセイビル1階文化ホールで開催いたします。2時から4時半までの「文化祭」と、休憩をはさんで、5時から7時までの「祝賀パーティー」からなりますが、「文化祭」はまだ残席が少々ありますので、ぜひお申込みください。できるだけ多くの会員にご参加いただき、協会の25周年を祝っていただきたいと願っております。(なお「祝賀パーティー」は申込を終了しております)。

内容は、ご覧のチラシのとおり。25周年という銀婚式に当たる節目にふさわしいものとすべく、昨年の夏ごろから理事を中心に相談を重ねた結果、音楽や美術、文学、味覚の専門家や、またいろんな経験を持つ会員が多彩に所属する当協会ならではの総力を挙げた企画となりました。音楽はバロック音楽、ピアノ独奏、ヴァイオリン曲、混声合唱、歌曲からシャンソンまで。美術はドラクロワや印象派についてを画像とともに、文学はジョルジュ・サンド、ヴェルレーヌ、コクトーについてを音楽の話と織り交ぜながら講演、さらにはジャメ先生によるフランス詩朗読も。味覚の分野では祝賀パーティーで供されるフランスの焼き菓子にフランスワイン。ご覧のチラシも会長自らが色合にこだわってデザイン、さらに当日配布プログラム、ステージの照明、音響、舞台まわりもホール専属スタッフ以外はすべて会員の手作りで運営されます。

コンサートや講演会は世の中に数ありますが、これだけフランスにこだわり、音楽、美術、文学、味覚の垣根を超えて融合を図った催しはほとんどないでしょう。さらにそのレベルも一級のものとして自負しております。この貴重な機会をぜひ見逃さないようにしてください。(杉谷健治)

奈良日仏協会創立 25 周年記念

### フランスの音楽と文化祭

奈良日仏協会創立 25 周年を祝し  
会員によるフランスの音楽演奏に加えて、文学や美術などにも親しむ文化祭を催します。  
記念としてのセレモニーを超えて、「会員参加」「会員交流」の場として  
25周年以降のさらなる発展の礎にしたいと考えます。

2019.6.22 (土)

14:00 (13:30 開場)  
生駒市コミュニティセンター  
1階 文化ホール  
【近鉄生駒駅南側 徒歩3分  
生駒セイセイビル内】

お問い合わせ 奈良日仏協会 E-mail: info@afjn.jp

### 14:00-16:30 フランスの音楽と文化祭

14:10-15:10 第一部

☆三つの歌 第1番 (ドビュッシー)、Salve Regina (ブーランク) 喜多幸子と仲間たち (アカペラ・コーラス)  
☆恋のうぐいす (P・クーブラン) バラ、カーネーション、タンブーランI、II (P・ドゥラヴィーニュ)  
坂本利文 (ヴィオラ・ダ・ガンバ) 坂本洋子 (リコーダー)

★お話し「サンド、ショパン、ドラクロワ」 高岡尚子  
★お話し「印象派とフランス美術」 知念夕紀子 (ピアノ)

☆ノクターン 13 番 op.48-1 (ショパン) 南城守  
★お話し「印象派とフランス美術」 三澤知音 (ピアノ)  
☆とだえたセレナード、ヒースの茂る荒地、花火 (ドビュッシー「前奏曲集」より) 三木康子 (ピアノ)  
★喜びの島 (ドビュッシー)

15:20-16:30 第二部

☆序奏とロンド・カプリチオーソ (サン・サーンス) 大津直子 (ヴァイオリン) 三澤知音 (ピアノ)  
★お話し「フランスの詩と音楽」 三野博司  
★オンディーヌ (ラヴェル「夜のガスパーレ」より) 藤村久美子 (ピアノ)  
★ヴェルレーヌの三つの歌曲 (ドビュッシー) 水谷雅男 (バリトン) 藤村久美子 (ピアノ)  
★詩朗読 « Il pleure dans mon cœur » « Chanson d'automne » (Verlaine) オリヴィエ・ジャメ  
★お話し「コクトー、サティ、ピアフ」 三野博司  
★ Je te veux 君が欲しい (サティ) 坂本成彦 (テノール) 藤村久美子 (ピアノ)  
☆「パリの空の下」「ハナミズキ (仏歌)」「愛の讃歌」 梨里智 (シャンソン) 三木康子 (ピアノ)

17:00-19:00 25周年祝賀パーティー

参加費:文化祭 会員 無料、一般 1000 円。申込先:E-mail:sugitani@kcn.jp Tel:090-6322-0672 (杉谷)

### 第 50 回奈良日仏協会シネクラブ例会 (2/24) 報告

昨年のアラン・ドロンの特集では、ドロンはじめとする個性的な男性俳優たちの活躍が際立っていました。今年度は新たな特集「女優たちの輝き」を組んで、フランスで活躍する女優を紹介していきたいと思います。第 1 回目に取りあげたのは、カトリーヌ・ドヌーヴとカトリーヌ・フロが義理の母娘を演じる、マルタン・プロヴォ監督の『ルージュの手紙』(Sage femme, 2017)。監督自身、出生時に助産婦さんに命を助けられた経験を持ち、助産婦へのオマージュとなる作品を作りたいという気持があったそうです。助産婦の仕事を描くドキュメンタリー風に淡々と描き出す前半部と、後半からラストにかけてのドラマチックな展開の組み合わせが見事でした。助産婦の日常や二人の女性の対照的な生き方は、観客に活発な意見交換と様々な発見をもたらし、各人が「自分らしさ」を発揮する、シネクラブらしいひと時となりました。以下に参加者のみなさんのコメントをまとめて紹介します。(浅井直子)

- ◆ ドヌーヴは『シェルブールの雨傘』(1964) から見ているが、今のほうが好き。『幸せの雨傘』(2010)もコメディタッチでよかった。75歳となったドヌーヴの強さが光る。気骨があると思った。年とっても堂々としている。彼女のように世界で活躍する日本人女優が出てきてほしい。フロも堅実にいろんな役柄をこなせる女優で好感を持つ。
- ◆ セーヌ川沿いの町マント・ラ・ジョリ(パリから列車で約1時間)が舞台。クレール(フロ)が休日に趣味の菜園で野菜作りをするセーヌの情景がきれい。父親は元オリンピックの水泳選手という設定で、水中で泳ぐ写真があった。最後の場面で水に浮かぶボートが映し出された。すべて「水」に関係し、隠れたテーマがあるのかも。
- ◆ ベアトリス(ドヌーヴ)は重い病気と診断されているのに、お肉をもりもり食べワインを飲んでいる。日本では女優は美しく撮るといふオブセッションがあるのか、病気で寝ていても髪も乱れない。
- ◆ フランス語の«C'est la vie.»(セラヴィ)は、「しょうがない」とあきらめの気持ちを表してネガティブに感じられることがあるが、この映画でポジティブな側面もあると、言葉の多義性に気づいた。
- ◆ 何気ないタッチで人間の生と死が描かれていた。出産シーンが実写で何回かあったのが印象的だった。自分も父親として娘が誕生するときに立ち会った時の感情を思い出した。
- ◆ スライド写真を上映してクレールの亡くなった父親の若き日の姿を母娘で見ている時、偶然部屋に入ってきたクレールの息子が横並びに映し出された。はじめてみる祖父の姿に驚く息子、二人がそっくりなことに感銘する母娘。過去から未来へと時間がつながるようだった。過去を語るのにフラッシュバック映像を使用しない演出がよかった。
- ◆ 最後の場面で一瞬、セーヌ川から死体が浮かび上がってくるのではと、ホラー映画を見ているときのように心臓がバクバクしたが、出てこなくて本当によかった。この終わり方によって、映画全体の意味に広がりをもたされた。ドヌーヴの大ファンでとくに『昼顔』(1967)が好き。ファッションが好きで真似していた時もある。シンプルなのにエレガント、きょうの作品のファッションもよかった。70代でもあんなファッションができるのが羨ましい。
- ◆ ベアトリスは大阪のオバちゃんみたいなどころもあり、自分みたいな生き方だと身につまされるところがあった。



◆◆◆ 「sage femme」。もっぱら助産婦の意味で使われているようですが、辞書で調べてみると、正確には助産婦は「sage-femme」で、「sage femme」となると、「賢い女性」という以外に「禁欲的な女性」とか「地味な女性」という意味もあるようです。フロ演じる主人公クレールはまさに助産婦であり、地味な女。そこに30年ほど音信不通だった継母、ドヌーヴ演じるベアトリスから電話が入ります。彼女は酒、タバコ、賭博、男と自由奔放に生きた末に脳腫瘍を宣告された状態。初めは縁を切ろうとしますが、ベアトリスが部屋に押しかけてきて、最終的にはそれを受け入れることとなります。映画は対照的なこの二人の対立と寄り添いを描いていきます。ドヌーヴは、学生時代に、『シェルブールの雨傘』と『昼顔』を見た記憶があります。そのときは、いかにもフランス女性らしい知的ですらりとした印象でしたが、今回は体型的にもヴォリュームが増えて妖艶な感じになっていたのに驚きました。フロは昔のドヌーヴ以上に知的で、かつ神経質で禁欲的な雰囲気。それが後半浮かれたドヌーヴに感化され変化していく様子が面白い。画面も淡い色彩が美しく、フランス映画らしい終わり方も素敵でした。(杉谷健治)

### 第 51 回奈良日仏協会シネクラブ例会 (7/28) の案内

★2019年7月28日(日) 13:30~17:00 ★奈良市西部公民館 5階第4講座室(予定)

★プログラム:『未来よこんにちは』(L'Avenir, 2016年, 102分)

★監督:ミア・ハンセン＝ラヴ Mia Hansen-Løve ★参加費:会員無料、一般300円

★飲み会:例会終了後「味楽座」にて ★問い合わせ:Nasai206@gmail.com(予約不要)

★「女優たちの輝き」第2回はイザベル・ユペールを紹介します。セザール賞主演女優賞14回ノミネートの史上最多記録を持つ彼女の役柄の幅広さは、すぐれた演技力と特異な存在感の証。ミア・ハンセン＝ラヴ監督は女優・映画批評家を経て映画監督となった経歴の持ち主です。(浅井)

★ピエール・シルヴェストリさんによる映画紹介:ナタリー(イザベル・ユペール)はパリのリセの哲学教師。仕事に情熱を持ち、自分なりの思考をすることを生徒に伝えようとする。結婚し二人の子供の母親として家族で暮らし、昔の教え子たちや独占欲の強い母親との時間も大事にする。ある日夫が別の女性と暮らすために家を出ると告げる。彼女は自由を前にして、自分の生活に新たな意味を見出そうとする。[続きは、7月以降に奈良日仏協会HPに掲載]

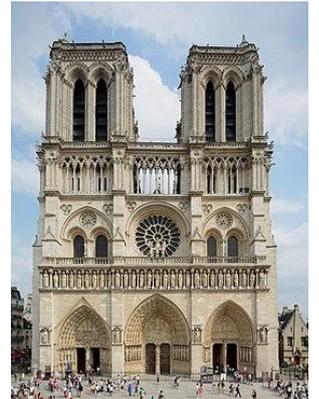


第 142 回 フランス・アラカルト (4/27)

「奈良県国際交流員ヴェロニク・ドニ＝ラロックさんをお迎えして」

10 連休初日の 4 月 27 日 (土)、「菜宴」で、会員 14 名の参加のもとフランス・アラカルトを開催しました。冒頭、三野会長から講師ドニ＝ラロックさんへ質問のやり取りを交えての紹介がありましたが、14 歳のときに、宮崎駿監督の「千と千尋の神隠し」をご覧になって日本への興味を持ち、大学在学中に京都へ 1 年間インターンシップで来られたことでもまず日本が好きになり、フランスへ戻ってから本格的に日本語の勉強をされたとのことでした。日本語がとてもお上手で、講話も、フランス語の後自ら日本語に訳して話してくださいました。

今日のフランスで、男性がほとんどだった職業に女性が就くようになったことから職業の男性形女性形が変わりつつあることなど、伝統保守の傾向が強かったフランス語の世界でも変革が徐々に起こっていることをさまざまな具体例で分かりやすく説明いただきました。例えば、労働者を意味する *ouvrier* には女性形 *ouvrière* があるが、作家 *auteur* には女性形がない。17 世紀ごろまでは *autrice* という女性形があったのに、アカデミー・フランセーズ会員が男性ばかりだったために、女性形を禁じたということなのです。初めて知ったことなので驚きました。また首相 *premier ministre* には男性形しかなく、そのため女の子は幼い頃から首相は自分に無縁だと思込むようになるなど、言葉が人びとの無意識に作用する大きな力を持っていることに気づかされました。



後半は、会合の 10 日ほど前に起こったノートルダム大聖堂の火災を受け、ヴィクトル・ユゴーの『ノートル＝ダム・ド・パリ』の大聖堂について書かれた文章を抜粋して朗読の後、参加者全員から自己紹介と感想、質問などを寄せていただきました。皆さん日頃から疑問に思っている男性形女性形や *vous* と *tu* の使い分けのタイミングなどの質問が出、また休憩中にも日本では配偶者をどう呼んでいるかなどについて面白いやり取りがあり、フランス語日本語が飛び交う楽しく有意義な会となりました。(杉谷健治)

◆◆◆フランス語の文法で日本語にはない男性・女性の区別があり、それも男性が優位にあることを子供時代から、刷り込まれているという事実。彼女はやんちゃだったので、男性が優位であることをさほどにも思わなかったそうです。フランス人の女性は共働きが多く、(特に都会では) 福祉制度も行き届き、保育所も完備され、働きやすい環境です。顧みれば、我々は御承知の通り、保育所は不足、また、特に奈良の女性の就業率は、最下位ではなくとも、低いのが実情です。私は女性の社会的進出を望んでいる一人です。(井田眞弓)

◆◆◆日頃これは男性か？女性か？と迷ったり、語尾に *e* をつけ忘れてたりと、何かと悩ましいフランス語の女性形。最近フランス語の職業名と肩書名の女性形が公的に承認されたというが、実際は賛否両論のようである。社会的に高い階層に属する職業(例えば *le ministre* など)には男性形しか存在しない、これは男女平等ではなく、女性形がないということは女子が社会進出を希望する妨げになるという理由、さすが人は皆平等を掲げるフランスらしい。言語は社会の文化度を測るバロメーターだから、文化国家と自他共に認めるフランスとしては当然かもしれない。この日は出席者それぞれが日本語とフランス語の両方でコメントし、日本語における女性形はどうかしらの話題から妻、家内、嫁さん、はたまた愚妻まで飛び出し、大笑い。フランスでも目下、世論沸騰の時機を得たテーマであった。(藤村久美子)



◆◆◆Je voudrais remercier l'Association Franco-Japonaise de Nara et ses membres qui sont venus assister à cet événement « France à la carte » au cours duquel j'ai pu aborder les débats récents sur la langue française, sujet qui m'intéresse, bien que n'étant pas une spécialiste. Tous les participants avaient une très bonne maîtrise du français et cela a été un grand plaisir d'échanger avec eux et de réfléchir ensemble à des questions de vocabulaire et de grammaire. Grâce à leurs interventions, j'ai également pu en apprendre plus sur la langue japonaise. Enfin, lors de la deuxième partie de cette rencontre, les participants se sont présentés et j'ai été très heureuse d'entendre leurs anecdotes et d'en apprendre plus sur le lien qu'ils entretenaient avec la France et le français. J'espère avoir encore l'occasion de rencontrer les adhérents lors de prochains événements à Nara. A bientôt !

奈良日仏協会とフランス・アラカルトにご出席された会員の皆様にお礼を申し上げます。話題として取り上げたフランス語の最近の事情は、私の専門ではありませんが、個人的に興味を抱いていたテーマでした。皆さんフランス語がとてもお上手で、フランス語の単語や文法の問題について、意見交換をしたり一緒に考えたりできたのは、たいへん喜ばしく思いましたし、そのおかげで、私の方も日本語について理解をより深めることができました。第二部では、自己紹介されたなかでいろんなお話が聞け、皆さんのフランスやフランス語とのつながりがよく分かって、嬉しくなりました。また会員の方々と、次の会合でお会いできるのを楽しみにしております。

(Véronique Denis-Laroque ヴェロニク・ドニ＝ラロック)

## 三重日仏協会 第19回「柏木隆雄文芸講演会」参加報告

4月7日(日)、津市において、三重日仏協会と放送大学三重学習センターの共催により、文芸講演会が開催されました。講師は、大阪大学名誉教授の柏木隆雄さん。大手前大学学長、日本フランス語フランス文学学会会長、放送大学大阪学習センター所長なども歴任されています。第19回目となった今年の演題は「オペラの『カルメン』、小説の『カルメン』」。昨年秋に白水社から刊行された、柏木隆雄著『対訳 フランス語で読む「カルメン」《CD付》』を基に、文芸講演会では初めての音楽入り、オペラの場面もスクリーンに投影されるという新趣向でした。

聴衆を惹きつけるいつもの柏木節で、小説各場面の詳細な解説を中心に、オペラとの相違、漱石を始めとする日本の作家たちに与えた影響など、話は広範に及びました。『カルメン』といえば、原作の第3章から物語を抽出して作られたビゼーのオペラのほうが有名ですが、語り手「私」による導入部としての第1、2章、そして学術的説明の第4章、それら全体としてメリメの作品の価値をとらえ直すべきだという結論は説得力のあるものでした。

17時からは、津駅前のレストラン Bistrot de Fleur で、三重日仏協会主催の懇親会が開催されました。例年のように、親密で快適な時間を過ごしたあと、別れ際には1年後の再会を約しました。といつもは書くのですが、今年は奈良日仏協会25周年記念「フランスの音楽と文化祭」にも何人かの方に来ていただけたとのことで、次の再会は6月22日ということになりました。

なお、余談ながら、2016-17年の「Mon Nara」にも、『カルメン』についての拙稿が2回にわたり掲載されています。「カルメン 名句の花束」で検索していただくと、ネットで読むことができます。(三野博司)



## Nos amis francophones à Nara (13) 岩切耕一さん

5月17日、セーヌ川にかかるポンヌフ橋近くにある天理日仏文化協会 (Association Culturelle Franco-Japonaise de Tenri) のパリ天理語学センター(École de langues de TENRI)にて、子供の日本語講座受講生のための「こども相談室」の心理・教育カウンセラーをされている岩切耕一さんに、お話を伺いました。(浅井直子)

◆自己紹介：パリの天理日仏文化協会に勤めて40年以上になりますが天理市民です。2006年から2010年の4年間は天理の本部に単身帰国していました。その間、奈良日仏協会のシネクラブ例会に時々参加しました。映画の後、生ビールを飲みながら浅井さんやピエール・シルヴェストリさんはじめ会員有志のみなさんと語らったことは、今でもとても楽しい思い出です。三木康子さんがパリに留学されていた時には、ピアノリサイタル開催のお手伝いをしました。現在のスクール・カウンセラーの仕事のために心理学を勉強し始めて10年目になります。放送大学奈良の大学院に在籍し修士論文執筆中です。毎年年度末には、パリから奈良まで単位認定試験を受けに行っています。

◆天理日仏文化協会の活動：フランスはlaïcité(宗教的中立)を原則とする国ですので、文化協会は天理教の宗教部門とは別組織として運営されています。語学センターには、日本人のためのフランス語講座、フランス人のための日本語講座があり、両者の日仏文化交流も盛んに行われています。センター内には小ホール(Espace Culturel Bertin Poirée)、書道・絵画の展示スペース、図書室等があります。小ホールでは年間を通じて様々な演劇・コンサート・パフォーマンスが行われ、とりわけ毎年開催されているFestival Buto(舞踏)は当地で広く知られる人気行事となり、フランス人・日本人だけでなく他のヨーロッパの国のダンサーも出演します。図書室には日本に関する一般図書の他にマンガがたくさん揃っていて、日本語のオリジナル版が読める子供には、ありがたい場所になっています。(いまやフランス人に大人気のmanga。フランス語版は一般書店で買えるそうです。)

◆スクール・カウンセラーの仕事：現在、パリ天理語学センターの子供の受講生は500~550人ほどで、そのほとんどはフランス人と日本人の間に生まれた二つの国の文化を持つ子供たちです。たいていの子供さんはフランス人と同じ小学校に通いながら、週一回だけここに日本語を習いにきています。語学教育ですが、こちらでは「継承日本語」と言っています。日本語を学ぶことは日本文化の継承であり習得ですので、日本語をどのように学んでもらえるか、フランス語学習とのバランスをつねに気にかけています。子供さんたちの家庭環境はそれぞれ異なりますので悩みも個々様々です。毎年5月終わりから6月初めには「子育て支援勉強会」を開催しています。センターでのスクール・カウンセラーの仕事が今の私の生きがいとなっています。



パリ天理語学センターの図書室にて  
同センターで日本語を学ぶ子供さんとそのお母さん

## 美術クラブ 第2回鑑賞会「ギュスターヴ・モロー」(7/20)の案内

- ◆日時：7月20日(土)午後2:00~4:30頃
- ◆集合：あべのハルカス美術館入口階(16F)ホール(エスカレーター近く)
- ◆内容：鑑賞のツボ解説(約15分)の後、館内見学。鑑賞後カフェで懇親会
- ◆参加費：会員500円 一般1000円(入館券は各自入手、懇親会は実費)
- ◆講師：南城守(絹谷幸二天空美術館顧問) ◆申込先:sugitani@kcn.jp 杉谷健治
- ◆講師からのメッセージ：豊穡なるイメージと卓越したメチエ(技巧)によって生み出された絵画美。聖書や神話を題材に、神秘的に、蠱惑的に、そして華麗に、鑑賞者を魅了してやまないのがギュスターヴ・モロー(パリ生、パリ没1826-1898)の世界である。



「出現」  
(「あべのハルカス美術館」HPより)

モローは、19世紀末フランス画壇の流行とは一線を画し、古典を愛し、東洋的装飾性を昇華させた綺羅星のように輝く繊細優美なスタイルを創出。「見えないもの、感じるものを信じる」という言葉通り、当時衆目を集めていた印象派運動と対極にある心象表現によって、世紀末の芸術運動に多大なる影響を与え象徴主義の先駆者と称された。さらにエコール・デ・ボザールの教授として、あのマチスやルオーの指導者でもあった。

今回、パリのギュスターヴ・モロー美術館の全面協力で約70点が出陳される。テーマは「サロメと宿命の女たち」。モローに影響を与えた身近な女性から、作品のモチーフとなった神話世界の主役たちが一堂に会する展示内容となっている。

パリのモロー美術館は、モローの居住・アトリエ空間が活用されていて、壁面にびっしりと並ぶ作品群は圧巻だ。豊富なデッサン資料も常時閲覧でき、モローの創意の根源を垣間見ることができる。愛弟子であったルオーが初代館長を務めたことでも知られ、多くの日本人ファンが訪れる美術館でもある。

夏の一時、モローの絢爛たる理想美に触れて日常の喧騒を忘れ、その後、冷たいビールで暑さを吹き飛ばす。もちろんいつものように美術評論家になった気分で展覧会の採点も忘れずに。ぜひこの至福の時間を一緒に楽しみましょう！(南城守)

## 2019年度 ガイドクラブの案内

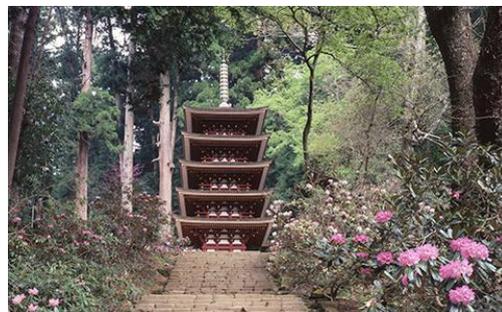
今年度のガイドクラブ散策は10月5日(土)に奈良県宇陀市室生の大野寺と室生寺を訪ねます。行程は以下のとおりです。

- 12:30 近鉄室生口大野駅集合、大野寺まで散策、宇陀川岸から弥勒磨崖仏見物
- 13:01 大野寺前のバス停からバスに乗車 13:15 室生寺着
- 13:25~14:35 室生寺門前の「橋本屋」にてNHKドキュメント番組「室生寺」視聴、講師による解説、見どころ案内
- 14:35~15:45 室生寺境内散策 15:45~16:15 橋本屋にて喫茶休憩、参加者懇談、解散
- 16:20 室生口大野駅行きバス発 16:30~18:00 橋本屋にて有志による懇親会(参加費3000円)
- 18:00 橋本屋のバスにて室生口大野駅へ

**【大野寺】** 白鳳9年(681)役小角によって開かれ、天長元年(824)弘法大師が室生寺を開いた時、西の大門として寺堂を建立したとされる。鎌倉初期1207年興福寺の荘園だった時、宇陀川対岸に弥勒磨崖仏の造営が始まり、2年後後鳥羽上皇が列席して開眼供養が行われた。高さ100尺(33メートル)に近い弥勒巖に、窪みを切り込んで弥勒仏の立像が線刻されている。仏身の高さは蓮座ともで38尺(11.5メートル)、日本石仏史上重要例。

**【室生寺】** 奈良時代末期の宝亀年間(770-781)、東宮(後の桓武天皇)の病氣平癒を願った興福寺の名僧賢憬(714-793)による創建。天武天皇の発願により役小角(役行者)が創建し、弘法大師が再興したとも伝えられる。室生の地は奇岩や洞穴が多く、洞穴は竜神の住み家として信仰を集め、祈雨や止雨の霊地とみなされていた。弘法大師が一夜にして建立したと伝承される国宝の五重塔は屋外ものでは国内最小。女性の参詣を認めたため女人高野と呼ばれるようになったのは、江戸時代以降。

**【橋本屋】** 日本を代表する写真家のひとり、土門拳が室生寺撮影のために常宿としていた料理旅館。玄関や廊下には土門氏の若き日の写真や「女人高野 拳」と記された最後の滞在時のサイン等が飾られている。



- ◆講師：竹本寿史(会員、室生寺ボランティアガイド) ◆参加費：会員1200円 一般1700円(要予約)
- ◆申込先：Nasai206@gmail.com 浅井直子
- ◆講師からのメッセージ：女人高野の愛称で親しまれている室生寺。今は、真言宗のお寺であるが、歴史を紐解けば、法相宗興福寺の別院として創建されている。都より遠く離れた山間の地に、天平文化の粋を集めた国宝の五重塔や金堂が建てられたのは何故か？ その金堂の内部には、国宝重文の仏達が、ところ狭しと配置されている。その並び方は、仏教の常識では考えにくいもので、謎に満ちている。何故なのか？ 室生寺が辿ってきた歴史を語りながら、室生寺をご案内したいと思います。(竹本寿史)

## 「フランス鉄道紀行」(5) 《ショパンゆかりの地 ノアン》 知念 宏司

「ピアノの詩人」として名高い作曲家ショパンはポーランドの生まれだが、よく知られている通り、人生のかなりの期間をフランスで過ごした。中でもジョルジュ・サンドの館があるベリー地方の小村ノアン (Nohant) は、ショパンの創作にも大きな影響を与え、ここで着想された名曲は数多い。

ノアンには鉄道は通っておらず、ここへ行くにはバスも併用することになる。パリからだ、まず Austerlitz 駅からトゥールーズ方面行きの特急列車 Intercités に乗る。これは TGV のない区間の最優等列車だ。列車はパリから 2 時間強でシャトルー(Châteauroux) に到着する。ここからバスに乗ると 30 分程度でノアンだ。最高速度 160km/h で疾走する列車でもこれだけかかるのだから、鉄道開通前、この道のりは大旅行だったに違いない。実はショパンの書簡で、パリからノアンへの行き方を説明したものがあるという。それによると、パリからシャトルーまで急行馬車で一晩、さらにラ・シャトル (ノアンの少し先の町) まで駅馬車で 2 時間半、都合 1 日半程度の旅だったらしい。

中心に小さな古びた教会があるこの村は典型的なフランスの田舎で、ショパンの時代から風景は変わっていないのではないと思われる。この地に立てばまさに「百聞は一見に如かず」で、例えばソナタ第 3 番の緩徐楽章など、ノアンの風景そのものだと納得する。

サンドの館は一種の博物館として公開されており、内部の見学が可能だ。ミュージアムショップではショパン関連の商品もさることながら、サンドの著書も多数売られている。日本ではとかくショパンとの関連で語られがちなサンドだが、本国では作家としての人気も高いことを思い知らされる。

他に村には観光案内所と 1 軒のホテル “Auberge de la Petite Fadette” (この名もサンドの小説から取られている) があるが、これといった店もなく、のんびりと散策を楽しんだ。よく晴れた美しい秋の一日を満喫できたことは大変よい思い出となった。

## 「モリエールの喜劇」(2) 『女房学校』 (L'Ecole des femmes, 1662) 山本 邦彦

『女房学校』は 5 幕韻文という形式で取り組んだ、モリエールにとって初めての本格喜劇です。主役となる 40 歳の独身男アルノルフは、13 年前、ゆくゆくは自分の嫁にするつもりで 4 歳のアニェスを買取り、できるかぎり無知なうすのろ女に育てようと修道院に預けます。17 歳で戻ってきたアニェスは期待通りのあどけなさで、「子供は耳から生まれるのでしょうか？」と尋ねるほどでした。しかし、アルノルフが 10 日間留守にした隙に、アニェスは窓辺を通りかかった青年オラスと恋に落ち、アルノルフの苦労は水の泡となってしまいます。



右: ルイ・ジューヴェ (アルノルフ)

アルノルフがアニェスを馬鹿な女に育てようとしたのは、才走った女は必ず浮気をする、と信じこんでいたからです。西欧では古くから、コキュ (寝取られ亭主) のことを、頭に角が生えた、と言って笑いものにする伝統がありました。彼が恐れたのは、ひとえにコキュになることでした。彼は言います、「ばかな女を女房にするのは、自分がばかをみないためなんです」。残念ながらアルノルフの思惑はみごとにはずれ、アニェスは恋を知り、自我に目覚め、大人へとまぶしいばかりの急成長を遂げます。自然は人為を超えたのです。

アルノルフを演じて高い評価を得た俳優は、なんと言ってもルイ・ジューヴェです。彼の残した 3 枚組のレコードがその面白さを存分に伝えてくれます。モリエール没後 300 年にあたる 1973 年に、18 歳だった新人女優イザベル・アジャーニがコメディ・フランセーズの舞台でアニェスを演じ、話題をさらったこともよく知られています。



シャトルー駅に到着する特急列車 Intercités



ノアンの教会

## フランス語で読む日本古典：万葉集第五巻 < 梅の花の歌 >と新元号の関係

日本には伝統的に暦法として固有の元号で年を数える制度があり、天皇の交代に合わせて新元号が公布されることになっています。この度採用された「令和」の典故について紹介してみます。万葉集の巻5に「梅の花」という項があり、その序文に「時に初春の令月、気淑（よ）く風和ぐ」と、「令」と「和」が記されています。

**Nouvelle ère au Japon**  
Début de l'ère impériale «Reiwa»  
le mercredi 1<sup>er</sup> mai

令

Rei  
Ordre, agréable

和

Wa  
Paix, harmonie

© AFP

—太宰帥 大伴の卿の宅に宴してよめる—梅の花の歌三十二首、併せて序  
天平二年正月の十三日、帥（かみ）の老（おきな）の宅（いへ）に萃（つど）ひて、宴会を申（の）ぶ。時に初春の令月、気淑（よ）く風和ぐ。梅は鏡前の粉を抜き、蘭は珮後の香を薫らす。加以（くはへて）曙は嶺に雲を移し、松は羅（うすきぬ）を掛けて蓋（きぬかさ）を傾け、夕岫（せきしふ）に霧を結び、鳥はうすものに封（こも）りて林に迷ふ。庭には舞ふ新蝶あり、空には帰る故雁あり。是に天を蓋にし地を坐（しきゐ）にして、膝を促して觴を飛ばし、言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開き、淡然として自ら放（ほしいまま）に、快然として自ら足れり。若し翰苑にあらざは、何を以てか情（こころ）をのべむ\*。請ひて落梅の篇を紀さむと。古今それ何ぞ異ならむ。園梅を賦し、聊か短詠（みじかうた）を成（よ）むべし。

○初春の令月とは、新春を迎えた凜とした寒気の残る中での「睦月」の意味で、「令」には美称として軽くうるわしく良い月（mois）の意味があり、公式発表の英語訳は beautiful, harmony とされますが noble（気品ある）も含まれるかもしれません。フランス語では AFP の記事によれば、右写真のように「令」は ordre, agréable、「和」は paix, harmonie となっています。

○気淑（よ）く風和ぐとは、大気が澄んでいてやや冷気を含みつつ風には温もりも感じられる、の意味です。総合すればこの元号の意図するものは、「令和」の時代が外患がなくなり、平和が訪れ、薫り高い文化が花咲く、そういう時代になってほしいとの願いが込められているのではないのでしょうか。

フランス人の日本文学研究第一人者ルネ・シフェールさんは『万葉集』を愛され、全巻を仏訳されています。奈良は万葉集ゆかりの地ということもあり、当協会主催の行事にて講演されたこともあります。Mon Nara 本号 12 頁に、フランス語訳を紹介していますので、参照なさってください。（中浦東洋司）

## 第 72 回カンヌ国際映画祭 2019 報告

5 月 14 日から 25 日までの 12 日間にわたって開催されたカンヌ国際映画祭。各賞の授与が進むにつれて、2019 年はもしかしたら一人の女性監督にはじめての栄誉が正当な権利として与えられた年になるのではないだろうか、と自問するに至っていた。（1993 年の第 46 回、ジェーン・カンピオン監督の『ピアノ・レッスン』がニュージーランド出身ではじめて、チェン・カイコー監督の『さらば、わが愛／霸王別姫』が中国語映画としてはじめて、最高賞受賞を分け合った）。

結局は、第 72 回は韓国の映画監督がはじめて最高賞を獲得した年として記憶されるだろう。メキシコの映画監督アレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥに率いられた審査員団は、ポン・ジュノ監督の 7 本目の長編作品『パラサイト』（韓国社会についての情け容赦のない分析を加える恐怖映画）に賞を与えた。

他の諸々の賞のほとんどが、コンペティションの新参者たちに与えられた。これまで一度も参加したことのなかった 8 人の映画監督の中で、次の 4 人が卓越していた。『Atlantics』で審査員特別グランプリを受賞したセネガル系フランス人の黒人女性監督マティ・ディオプ（Mati Diop）、『Little Joe』でエミリー・ビーチャムに女優賞が与えられたオーストリアの女性監督ジェシカ・ハウスナー（Jessica Hausner）、『Portrait de la jeune fille en feu』で脚本賞を受賞したフランスの女性監督セリーヌ・シアマ（Céline Sciamma）、『Les Misérables』で審査員賞を受賞したフランスのラジ・リ監督（Ladj Ly）である（彼は、クレール・メンドンサ・フィリョとジュリアーノ・ドルネル監督の『Bacurau』と受賞を分け合った）。

歴然として秀でた作品がほんのひとにぎりしかない不作の年に、全員が一致した受賞者リストを作るのはとても簡単なことだ。今回は、審査員長イニャリトゥとその仲間の審査員たちは、不当を犯すことを強いられていた。またもやパドロ・アルモドバル監督から最高賞パルム・ドールを取り上げ、マルコ・ヴェロッキオ監督の『Le traître』を無視し、クエンティン・タランティーノ監督の『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』の演出の奇才たちがあたかも存在しなかったごとくに、グザヴィエ・ドラン監督の『Matthias & Maxime』が再発見されなかったごとくに、したというわけだ。（ピエール・シルヴェストリ）



会員投稿

フランス語とのお付き合い

藪田 章恵

奈良日仏協会に入会して 20 年以上が経つ。これまでの人生を振り返ってみる意味でも、私のフランス語との関わりを、この機会に 3 つの時期に分けてお話ししたい。



筆者が通学していた大学の文学館

(1) 「大学の第 2 外国語として」(10 代後半)

45 年前に文学部英米文学科に入学した頃は第 2 外国語が必須科目で、通っていた大学ではドイツ語とフランス語からの選択に限られていた。現在は、中国語、スペイン語、ロシア語、インドネシア語など選択肢が多く、卒業後のビジネスに役立つことを見越して選んでいる学生もいるようだ。当時はそういう現実的な考え方をしている学生は少数だったと思う。私がフランス語を選択したのは、響きが心地よく、ドイツ語のゴツゴツした響きよりも親近感が湧いたからで、第 2 外国語の単位を取るためだけの怠け者の学生だった。

外国語習得には基礎文法や簡単な会話の暗記など地道な努力が必要だが、時には退屈でもある。自分の興味のある分野と繋がっていたら、苦に感じなかったかもしれない。「英語の勉強は嫌いだけど、ビートルズの歌が大好きで、何度も聞いたり歌っていると自然に句型や単語が覚えられた」という高校時代の同級生がいた。外国の友人を持ったり外国に住むことで、使わざるを得ない状況に身を置いたりするのもいいだろう。当時の私はどれにも縁がなく、今思えばもったいない青春時代を過ごしてしまった。

(2) 「熱中時代：阪神淡路大震災後」(30 代後半)

結婚後、パートタイムで英語講師の仕事が続いていた時に阪神淡路大震災が起こった。明日は何が起こるか分からないという気持ちを強く持ち、自分も今「何か」やっておきたいことがあれば即始めるべきだと感じた。当時「何か」として頭に浮かんだのが、20 年以上前に少し触れただけのフランス語だった。奈良日仏協会のフランス語講座でレッスンを始めた。場所は今はもうなくなった学園前駅の北にあった味噌会館。講師は日本人で生徒は 10 人前後、教科書を使つての授業だった。月 1 回ネイティブ講師の授業があり、日頃学んでいるコミュニケーションを実践的に試すことができ大変充実していた。おかげでその講座に何年も続けて通った。

そのうちにこれだけでは物足りず、大阪のフランス語学校へ通い始め、映画(聞き取りと会話)と時事(読みとライティング)のクラスを受講した。そこで、英語のフリーランス通訳の仲間に出会い彼女の向上心に刺激を受けて、一気に DALF の最上級まで取得できた。ビジネス通訳をしていた彼女は「企業の CEO はほとんどが MBA を持っており、会話の中で通訳の私たちにはわからないだろうと思い、こそとフランス語を話すことがある。自分もそれぐらいできるようになっておきたい」と、常々漏らしていた。その彼女にパリ商工会議所のビジネス関連の資格と一緒に取らないかと誘われた。時事フランス語のクラスでは政治やビジネスの話題が多く、彼女と 2 人でセミ・プライベートレッスンを受けた。講師から、将来役立つのは Certificat de français professionnel だとアドバイスを受け、受験した。筆記と領事館員との面接の試験があったが、何とか乗り切つてこれを取得したことが、フランス語に熱中した 6 年間の一番の成果だったと思う。

(3) 「細く長くのお付き合い」(40 代半ば以降)

その後、興味をもった発達心理学、経営学、英文化史を学ぶため大学院に通いつつ、開業医として独立した主人の仕事をサポートする小児科医院の事務長の仕事を始めた。発達心理学を研究した大学では、三野先生のフランス語講座に出席させていただき、日仏協会の仲間とも出会うことになった。そのことで、いつもフランス語のことは頭に持ち続けることができている。フランス語でビジネス関係の試験を受けたことで啓発されて経営学の MBA コースに通う気持ちにもなれた。英文化史でビクトリア朝後期の執事について研究した時、論文演習の時に先生方から「フランスにも貴族がいたのだから、イギリスだけでなくフランスとの比較もしたらどうか」とアドバイスを受けた。それは保留になっているが、なぜか関心はいつもフランスと重なっている。



このような 3 つの時期を経た現在、フランス語でわからないことがある時には『新・リュミエール』(右写真)を参考している。CD が付いていること、発音のカタカナ表記が初めの 3 課までという配慮が気に入っている。脳の活性化には音読がいいらしい。音読は習得のために効果があり、還暦を過ぎた私には呆け防止なり、語学学習のマナー化予防になる。18 歳での出会いを大切に、このまま老後の楽しみとして、フランス語とのお付き合いを続けていきたいと思っている。

マルセル・プルーストとイリエ=コンブレの町

浅井 直子

2019 年は、マルセル・プルーストの小説『失われた時を求めて』(全 7 篇) の第 2 篇『花咲く乙女たちのかげに』ゴンクール賞受賞 100 周年と、プルーストが少年時代に復活祭の休暇を家族とともに過ごしたイリエ=コンブレの町 (パリから南西約 120 キロ) の中世の城塞建築開始 1000 周年とが偶然重なり、記念すべき年となった。5 月 11~19 日の 9 日間、ユール・エ・ロワール県では Printemps Proustien (プルーストの春) と銘打った行事が開催され、ふだんは昼間でもほとんど人通りのない人口約 3000 人の小さな町は、めったにないようなにぎわいをみせ、各種パレードやセレモニー、絵画展覧会、コンサート、演劇、映画、講演、朗読、散歩、クイズ大会、夕食会、ダンス、松明行列、花火等々、盛りだくさんのプログラムが並行して行われた。



初日 11 日夜の Repas Proustien では、野外庭園の一角に大きなテントが張られ、200 人もの人々がテーブルに着席し、地元のボランティアの給仕係りや余興のコーラス・グループのメンバーなども大勢いて、ものすごい活気がただよっていた。にもかかわらず、まったく混乱することなくプルーストにちなんだコース料理が、順番に一人一人のテーブルにきちんとしたマナーで給仕され、フランスの食事文化に感心した。メニューの一つの *salade japonaise* が出された時には、周囲の人から「日本料理ですか?」と訊ねられたが、興味しながら「おそらくプルーストが創造した料理名で、これはどうもフランス料理のようです」と答えた。コーラス隊の歌の合間には拍手や歓声があがり、隣り合った人同士でにこやかな歓談が続く。デザートがすむ頃には、いつの間にか楽団が音楽を奏で

ていて、Guinguette (森の中でのダンスパーティー) が始まった。踊りたい人やカップルが特設ステージに踊りに行ってはまたテーブルに戻ってきて、自分たちのリズムで楽しんでいる。ふと時計を見ると 11 時半を過ぎている。いつの間にか帰宅した人もいれば、まだまだ踊っている人も少なくない。昔はこうして翌朝まで踊り続けることもあったそうだ。『シルヴィ』など、かつて読んだ小説の世界にまぎれこんだような気がした。

翌 12 日午前には地元の新聞社が主催する散歩会 (Les Balades du journal) に参加。1 時間・2 時間・3 時間のコースがあり、顔見知りの人たちとともに 2 時間コースを歩いた。町を離れてル・ロワール川 (プルーストの小説では「ヴィヴォンヌ川」) の源泉のひとつサン・テマンまで行き (小説では「ゲルマンのほう」)、広場のテントに用意された飲料とスナックでしばし休憩。野道の途中、咲いている花を見つけると足を止めては写真を撮り名前を聞きながらゆっくり歩いたせいか、出発地点に戻ってきた時には 2 時間のコースなのに倍近く時間が経っていた。麦畑の土地のイメージが強かったせいで、それまですべて小麦 (le blé) と思っていたのが、全体が緑色で穂が直立しているのが小麦、穂先が薄いピンクになって広がっているのは大麦 (l'orge) だと道中教わった。風が吹くと大麦の穂先が揺れて広大な畑に幾重もの波が微笑むようにうねっている。「なんて素敵な眺め!」地元の人と感嘆しながら、しばらく見入っていた。



サン・テマンからの帰り道、プルーストの小説の「ゲルマンのほう」の散歩途中で主人公が立ち寄ったことが暗示されている「ミルグラン」という大きな池のある広い庭園が、コースに入っていた。この日はオーナー夫妻が散歩者を迎え入れてくれ、少年プルーストが家族とともに散歩の途中に入ってきたとされる門や、かつてそこに住んでいた謎めいた女性について話をしてくれ、関係するプルーストのテキストを朗読してくれた。スイレンの花の時期にはまだ少し早かったが、水面を探索と一つだけぽつんと黄色い花が咲いていた。1 年前の 7 月にこの庭園を訪れた時には、すでに花の時期は終わっていた。今年こそは水面いっぱいにスイレンの花が咲いているのを見られることを願って、5 月末~6 月初めにあらためて訪問させてほしいと御主人に伝え、庭園を後にしようとした。すると門までの途中、池のほとりに黄色い可愛い花が咲いているのが目にとまった。写真におさめ、後で土地の人に尋ねると「このあたりでは coucou と呼んでるわ」と言う。辞書で調べると、鳥の「カッコウ」と、植物の「ラッパズイセン」「セイヨウサクラソウ」の両方の意味が載っていた。プルーストを読み直してみると「ゲルマンのほう」に coucou がちゃんと記されているではないか! (とても嬉しかった)。他に卵の黄身の色をした「キンポウゲ」もゲルマンのほうの花として描かれていて、黄色い花が多いことに気づいた (スイレンの描写に関しては、プルーストはモネの絵を参考にしたようで、黄色とは書かれていないことが興味深く思われる)。

13 日いったんパリに戻り、フィナーレの行事を見学するため、次の週末の 18 日再びイリエ=コンブレを訪れた。夜、教会広場に大勢の人が集まり、松明を手にしてプレカトランの庭園まで練り歩く。庭園内は小道に沿ってロウソクの火が灯されている。子供連れの家族や、若者から老人まで、いろんな世代の人がゆっくり散歩しながら知人に会えば互いに挨拶しては立ち話。優しい音楽の調べと、俳優アンドレ・デュソリエによるプルーストの「コンブレ」の箇所朗読音声が静かに流れている。夜が更けるとラフォンテーヌ通りの水辺に移動し、いよいよクライマックス。lanterne (カンテラ) を搭載した小さな気球がゆらゆらといくつも暗い夜空に舞い上がり、風に乗って遠くの空に消えてゆく。幻想的な光景だ。同時に教会の鐘塔の上方に熾火が灯されたのが見え、夜空の離れたところで火と火が呼応して互いにサインを送っているかのようだ。フィナーレの花火が次々と打ち上げられて、一気に空が明るくなる。さいごに地上の仕掛花火に Marcel Proust の自筆署名文字が闇の中から浮かび上がると、自然に拍手がわきおこり、あたりはしばらく静かな感動に包まれていた。

### ホテルマンの経験

上野 正暢 (うえの まさのぶ)

皆様はじめまして、この度奈良日仏協会に入会致しました。皆様に直接お目に掛かる前に自己紹介をさせて頂く有難い機会を得て、拙い筆を取らせて頂いております。

私は兵庫県赤穂市の生まれで、現在は学園前に暮らしています。赤穂は、赤穂自体をあまりご存じない方にも四十七士は良く知られており、瀬戸内海に面し塩業や坂越の牡蠣など、海の幸に恵まれた土地でもあります。家からも海は近く、潮の香りになれ親しんで育ってきました。赤穂浪士の影響か、市は剣道が盛んで、私も小学生の頃は道場に通り、毎年12月14日の義士祭の日には、大石神社境内で早朝から剣道の奉納試合に出場したものです。その時の冷たい土の感触を今も忘れる事はできません。剣道の腕前は今ひとつでしたが、剣道の経験はホテルマンとしての姿勢に活かされているようで、剣道を勧めてくれた父に今も感謝しています。



大学卒業後、(株)ロイヤルホテルに入社しホテルマンの道を先ずは京都勤務からスタート致しました。入社当初、分かっていた事とは言え、ホテルという業種は365日24時間営業、とくにお盆正月は多忙時期で、私のような田舎育ちにとって、盆正月の親戚家族や友人の集まる時期での勤務は、潮の香を一層遠く感じさせられるものでもありました。京都勤務での約半分は宿泊部門、半分は営業企画部門と、多くの方々から指導を受けお客様にも育てられながら、良い経験を積む事ができました。経験年数もさることながら、ホテルマンになったのかなと思えたのは、利用した他ホテルで何気なくロビーに立っていると、そのホテルのスタッフと思われて、館内の事を尋ねられた時でした。その後も同じような経験致しますが、ついでできる限りの対応をしてしまう自分に苦笑する一方で、ホテルマンなんだと思える瞬間でもあります。大阪での大半は宿泊部門を担当し、宿泊部長、副総支配人として充実した9年間を過しました。その後京都に戻りますが、昨秋、縁あって登大路ホテル奈良に着任し、職住近接どっぷりと奈良に浸れる事となりました。

ご承知の通りホテルはフランス料理と係わりが深く、料理・ワインを通じてフランスの食文化を身近で感じてきた者として、このたび皆様の協会の一員に加えて頂き、深く感謝致しております。まずは皆様との交流をコツコツと広げて行ければと思っておりますので、宜しくお願い致します。

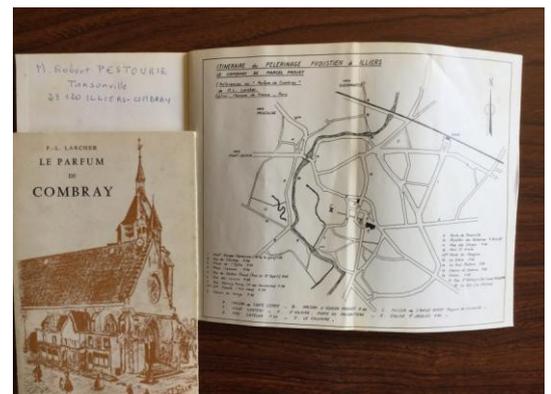
### フランス旅行の思い出

白鳥 保二 (しらとり やすじ)

鉄道の旅が好き。知らない街で居酒屋などに入り現地の人達と話をするのが好き。フランスへ初めて行ったのは1985年2月。出張でドイツへ行った序に、用事を捏造してフランスへ足を延ばした。ケルンからTEE(Trans Europ Express 欧州特急、1988年廃止)に乗りブリュッセルで乗り換え、パリ北駅に着いたのは夜8時過ぎ。わずか三日間の滞在中、一日をルーブルで過ごし、二日目モンパルナス駅からシャルトルへ行き大聖堂のシャルトルブルーのステンドグラスに感動した。その後、仏文の学生時代に卒論で取り組んだマルセル・ブルーストのゆかりの土地Illiers-Combrayに向かった。

レオニー伯母の家(休館日で中には入れなかった)、聖ジャック教会、ゲルマントの方、ヴィヴオンヌ川沿いの洗濯場らしき場所、メゼグリーズへの道など、ブルーストの世界を歩き回った。夕方近く、道が分からなくなり、通りかかった車に道を尋ねたところ、駅まで乗せていってくれるという。50年配の男性だった。ブルーストが好きだというようなことを覚束ないフランス語で話しながら何か思い出に買いたいと言うと、駅の近くの雑貨屋兼本屋に寄ってくれ、店員に勧められて購入したのが *Le Parfum de Combray* という本(下写真)だった。送ってくれた男性に、記念にと名前と住所を本の裏表紙に書いてもらった。彼と別れた後、駅前の居酒屋のような所でワインと軽食をとりながら、店の主人やお客さん達と話し込んでしまい、最終のシャルトル行きに乗り遅れた。店にもどり、シャルトルに行く方法を聞いたが、タクシーしかないとのことで、店の主人がタクシー会社に電話をして手配してくれ、何とかその日のうちにパリのホテルに戻り、翌日予定通りドーバー海峡を渡ってイギリスへ行った。

以後、フランスへは数年前に再び行く機会があったが、残念ながら、Illiers-Combrayには行けなかった。昨年、正規の仕事を引き退し、今年は奈良日仏協会の存在を知り、会員に加えてもらったのを機に、フランス語を学び直し、Illiers-Combrayを再訪したいと思っている。



フランスと日本、その違いから何を学ぶか 山下 真 (やました まこと)

これまで何度か当会の行事に参加させていただき、この度正式に入会致しました弁護士の山下真と申します。私がフランスと関わりを持つようになったのは、大学の専門課程でフランス文学を専攻したことからです。その選択は何となくしたものでしたが、私の人生に一定の影響を与えたと思っています。勤勉な学生ではありませんでしたが、せめてフランス語をある程度マスターして卒業したいなどと考え、大学3年生から4年生にかけて、一年間休学してフランスのグルノーブルに語学留学しました。



当初は、フランスのお店や公共機関のサービスの悪さに辟易し、やはり日本のサービスは素晴らしいと日本びいきが強くなりましたが、しばらくすると、両国それぞれの良さ悪さが分かってきました。フランス人は空気を余り読まず、思ったことはストレートに口にします。集団の中でも一人ひとりの個性を大切にしてくれるように思います。日本人は以心伝心を良しとし、個性より集団の秩序を重んじます。どちらが良いのか一概には言えませんが、私自身にはフランス人の感性の方がよりフィットすると思っていました。卒業論文ではカミュの「ペスト」について論じました。「不条理と闘う」という彼の生き様や小説の主題は、私のような弱く中途半端な人間に少し力を与えてくれました。

最近、フランスでジレ・ジョーヌ (黄色いベスト) の運動が起き、世界的な注目を浴びました。革命の国、個人主義の国、フランスらしいと思いましたが、個人の生活を大切に、労働環境や社会保障が手厚いそのライフスタイルや社会制度がグローバル経済の荒波に揉まれ、岐路に立っているのかなとも思いました。その一方、フランスでは PACS という事実婚を保護する制度などで多様な家族の形を認め、少子化を克服しつつあるかにも見えます。

日本はどうでしょうか。フランスより失業率は低く、ストも無くてサービスは世界トップレベル。移民を抑制してきたことで今はまだ大きな問題も起きていません。しかし、少子化は一向に収まらず、労働力も足りません。単身世帯も増加の一途で、自殺率はフランスより5%も高く、国民の幸福値が高いのかどうかはよく分かりません。良い面も悪い面も含め、フランスから日本が学ぶべきことはまだまだありそうだと感じています。

文学や音楽の話に加え、そんな議論も皆さんと出来るのを楽しみにしています。

私とフランスとの関わり 古森 淳一 (ふるもり じゅんいち)

私の人生の大半はアメリカとの関わりで、30代前半はロスアンゼルスで4年半駐在員として過ごしました。従ってフランスと私の関わりはビジネスが中心でした。仕事は繊維貿易で特殊機能素材。簡単に申し上げますと、世界各国の軍隊や警察へ特殊なユニホームの生地を輸出しています。古い話ですが約10年前に幾度となくフランス陸軍 (国防省) へ訪問し商談をしました。主に商談場所はフランス南西部の都市トゥールーズ (Toulouse) で、この町は世界を代表する巨大航空機メーカーのエアバス社 (AIRBUS) の主力工場があることで知られ、軍需産業の下請工場が沢山集中している土地柄でもあります。



バンフ国立公園・カナダにて

町の印象として、建物が赤いレンガで作られ、古い歴史を感じさせる街並みが記憶に残っています。街全体はゆったりとした雰囲気があり、首都パリとは全く違った素晴らしい地方都市でした。商談後のランチや夕食では、必ず鴨料理の食材が出されたことをよく覚えています。ある時どうしてかと尋ねたところ、鴨はトゥールーズの郷土食材で、南仏では沢山の人が好んで食べる食材だと自慢げに話していました。じっさい美味しく頂いた事も良い思い出として残っております。

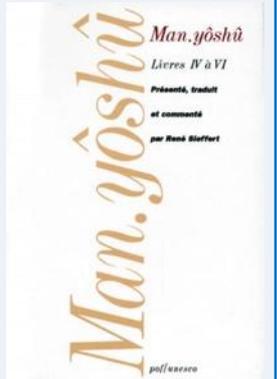
フランス陸軍の軍服の柄 (通称カモフラージュ迷彩柄) ですが、他の EU 諸国の柄と比較してもオシャレなデザインと色合いで、ドイツの軍服の色柄と正反対。それぞれの国の伝統と文化が軍服にも影響受けていると感じました。

本号 7 頁「フランス語で読む日本古典：万葉集第五巻<梅の花の歌>と新元号の關係」をご参照下さい。

Man.yôshû, Livres V, traduits par René Sieffert, Collection UNESCO d'Œuvres Représentatives 1998, pp. 191-193, Trente-deux poèmes sur les fleurs de prunier. (Avec une préface) :

L'an deux de Tenpyô, le treize de la première lune, l'on se réunit en la résidence du respecté Gouverneur Général, et l'on y tint un banquet.

Voici le beau mois du début du printemps, l'air est doux et la brise légère, le prunier a déployé ses fleurs blanches comme poudre d'une belle à son miroir, l'orchidée répand une odeur suave comme poche à parfums. Ajoutez à cela les nuages qui, au point du jour, s'accrochent aux cimes, et les pins qui, s'en faisant un voile, inclinent leur ombrelle ; le soir un brouillard se forme sur les cimes, et les oiseaux, enfermés dans cette tenture, errent dans les bois. Dans le jardin dansent les papillons nouvellement éclos et dans le ciel passent les oies qui s'en reviennent. Lors donc, le ciel pour dais et la terre pour tapis, rapprochant nos genoux, nous faisons circuler les coupes. Toute l'assemblée en oublie la parole, et l'on ouvre le col des vêtements aux brumes du dehors. Chacun prend ses aises et en éprouve une agréable satisfaction. S'il n'existait le jardin des Lettres, comment exprimerions-nous pareilles émotions? Dans la poésie en langue de Han, elles sont décrites dans la rubrique de la chute des fleurs de prunier ; or, de jadis et naguère, où est la différence? Ainsi donc, sur le thème : « Pruniers du jardin », composons-nous quelques poèmes courts.



《2019 年度第 2 回理事会報告》.....事務局 日時：2019 年 5 月 16 日 (木) 15:00~17:30。場所：放送大学奈良学習センター Z308 号室。出席者：三野、野島、藤村、中辻、高松、喜多、菌田、三木、杉谷。議題 1. 2019 年度会員数：件数 89 件、うち会費納入 66、未納 21、新入会 5、退会 2。議題 2. 3/14 理事会後の活動：第 142 回フランス・アラカルト「ヴェロニク・ドニ＝ラロックさんを迎えて」(4/27)。議題 3. 今後の行事：創立 25 周年記念「フランスの音楽と文化祭」(6/22)、美術クラブ第 2 回鑑賞会「ギュスターヴ・モロー展」講師南城守(7/20)、第 51 回シネクラブ例会『未来よこんにちは』(7/28)、第 143 回フランス・アラカルト「エレナ・ファージュさんを迎えて」(7 月か 8 月⇒その後 8/31 に決定)、フランス語会話講座 (9 月から)、2019 年度ガイドクラブ「室生寺散策」講師竹本寿史 (10/5)、秋の教養講座(11/23) 講師角田茂、議題 4. Mon Nara。議題 5. その他：次回理事会 7 月 18 日 (木) 15 : 00~16 : 30 Z306 号室にて。



編集後記 ☆今号から再び編集のお手伝いをする事になりました。日本では天皇の即位に応じて日本の暦制による特有の「元号リセット」が行われてきましたが、フランスでは革命政府が新暦制度を提示した歴史があります。これは結果的には完全な失敗に終わりましたが非宗教的であることは評価できるでしょう。私が「フランスにとって一時代を画した年を《元年》に選びなさい」といわれれば、西暦 732 年を選ぶでしょう。なぜならこの年、ウマイヤ朝のイスラム軍がガリアに侵入し、各地で戦闘が繰り返されたのち、遂にツール・ボワチエ間の戦いでフランス軍が国難を克服した年だからです。それ以後はフランスが一国としてまとまってきたので王朝交代ごとに元号を付けるのが「時代のまとまり」として意義があると考えます。

(T. Nakaura)

☆記念すべき「令和」の第一日をイリュエ＝コンブレで迎え、いつにも増してこの町に来られたことが嬉しく思われました。田園に囲まれた静かで平和な土地柄、住んでいる人たちの気質も穏やかで親切、ちょっと日本人みたいなのところもあると感じるからでしょうか。フランスでは 5 月 1 日はメーデーで国民の祝日ですが、古来よりサンザシ(aubépine) やいろいろな花が咲き始める「春」の象徴的な日でもあったようです。5 月中旬の「プルスートの春」の行事では、地元の人でも他所から訪れた人も一緒になって楽しんでいましたが、日本人の私が印象深く思われたのは、この行事のことを « harmonie » に満ちていてよかったと、何人かの人が口にしていたことです。フランス語の harmonie は、令和の「和」の訳語にもなっていますが、いわゆる日本的な「和」とは少し意味合いは異なるようです。いろんな次元において異なる者同士 (子供から老人まで異なる世代間、異なる職業・趣味・活動に携わる人々の間、等) が、相手の存在や価値観を認め合って文化を養い共存するというあり方、と言ったらいいでしょうか。この町の人にはプルスートの愛読者とは限りませんが、少年時代にこの町で過ごしたことを作品に描きこんでくれた作家にリスペクトを払い、町の文化として継承していこうとしているように感じました。長年親しんできた「レオニー伯母の家」のプルスート博物館は 9 月から改修工事のため 1~2 年間ほど閉館となり、新しく建て替えられてしまうそうで淋しいかぎりですが、異なる土地や世代の人びとが「プルスート」を文化として養い育てていく拠点になるのかもしれない。6 月初めにスワン氏の庭園のプレカトランを訪れた時、サンザシの坂道の上の入口の所に大きな菩提樹 (tilleul) が立っていて、花が咲きかけていることに気づきました。花を摘んで乾かして煎じ茶を作るのはまだ少し先だそうです。(N. Asai)

- ◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
- ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、直近のフランス情報などを歓迎します。誌面の都合でご相談のうえ、表現を変えさせていただくことがあります。Mon Nara10 月号は **9 月 25 日**が原稿締切日です。

Mon Nara 2019 年 6 月号 numéro290

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : [nara.afj@gmail.com](mailto:nara.afj@gmail.com) FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司